Centro di Ricerca sulla Pittura Murale Italiana, Università di Kanazawa

Newsletter

金沢大学 フレスコ壁画研究センター

Vol.2
March 2011

◆特集 1［金沢大学　日伊教育研究連携事業］

イタリア伝統技法の極意を伝受

フレスコ壁画修復と保存「剥がしの技法」

◆特集 2［南イタリア中世壁画群 診断調査プロジェクト］

第 2 回予備調査：世界遺産マテーラ

◆研究者の横顔 第 2 回

フレスコ画に問う、耐久性設計のヒント

◆コラム 第 2 回　私のおすすめフレスコ壁画

「私のおすすめ鑑賞法」聖十字架物語

◆レポート ラヴェンナのモザイク壁画探訪

サン・ヴィターレ教会

◆連載　フレスコ八景　第二景

サン・ドメニコ教会「磔刑図」

Special

特集１［ 金沢大学 日伊教育研究連携事業 ］

イタリア伝統技法の極意を伝受

世界トップレベル フレスコ壁画修復と保存「剥がしの技法」

国立フィレンツェ修復研究所 専任修復士を招へい

金沢大学フレスコ壁画研究センターでは、「日伊教育研究連携事業」として、2010 年秋、国立フィレンツェ修復研究所マリアローザ・ランフランキ専任修復士（本学が 2004 年から取り組んできた国際貢献プロジェクト「サンタ・クローチェ教会大礼拝堂壁画修復プロジェクト」の主任修復士）を招へいし、人間社会学域人文学類フィールド文化学及び学校教育学類美術教育、理工学域環境デザイン学系学生等を対象に、集中講義及び学生実習指導を行いました。

イタリアでは 1980 年代以降、できるだけ壁画を建造物から剥がさない方向での修復と保存を実施していますが、壁画保存の最終手段としての「剥がしの技法」は病んで傷ついた壁画に対する重要な治療法であることに変わりありません。ですから、「剥がしの技法」は常に慎重をきわめ、繊細で高度な技術が要求されるのです。

本実習に先だって、これまでの材料･技法研究を活かし、絵画担当の大村雅章教授が「聖十字架物語」（サンタ・クローチェ教会大礼拝堂）の一部を 3 点同時に原寸大で忠実に模写したものに、彫刻担当の江藤望准教授が衣服のセッコ部分に蜜蝋と金箔による金彩装飾を施しました。3 点のうち 1 点は剥がさずに壁面に残し、残り 2 点をストラッポ法（最上層の描画面のみを薄く引き剥がす技法）とスタッコ法（下塗り漆喰と上塗り漆喰の層間で剥がす技法）で壁面から剥がして比較、壁画をどこまで忠実に保存できているかを検証しました。

実習初日の 11 月 19 日、3 時間半にも及ぶマリアローザ・ランフランキ専任修復士の充実した講義には、多数の学生たちが参加して、壁画修復最前線の状況と修復理論に熱心に耳を傾けました。翌日から始まった 6 日間の実習指導でも、世界遺産の修復に携わるプロの技を学生たちはひとつも見逃すまいという気迫で実習に臨み、実習が夜遅くまで長引いても、学生たちは最後まで熱心に参加していました。

剥がし技法の実習を行うマリアローザ・ランフランキ修復士

最終日にはマリアローザ・ランフランキ専任修復士と宮下孝晴センター長から、金沢大学と国立フィレンツェ修復研究所のロゴマークの入った修了証書が参加した学生全員に手渡され、鮮烈な印象を心に刻んだ実習は感動のうちに幕がおろされました。

フレスコ画の描画層のみを丁寧に剥がす作業

フレスコ壁画修復　実習体験記

人文学類 フィールド文化学コース３年　寺田瑞希

本来フレスコ画は壁とは不可分のものです。壁、つまり建築物と一体となって作り出す世界がその最も魅力的な点の一つだと思います。しかし、実際の修復現場では保存のためにフレスコ画を壁から剥がし、独立させなければならないこともあります。この保存作業によって“壁画”はどのように変化するのだろうか。そのような思いを胸に、私は実習に臨みました。

実習中に印象的だったのは、修復士のマリアローザさんのよどみなく動く手です。世界トップの技術を誇る国立フィレンツェ修復研究所で培われた技術は、壁画の修復についてあまり知識のない私にも伝わってくるほど、完成されていて美しいとすら感じられるものでした。この実習は限られた期間で行わなければならなかったことも影響していたと思いますが、一つ一つの作業が確実で手早いことに加え、彼女は常に先の作業を想定し行動していました。しかしそれは単純に手慣れている、ということに留まるものではなく、彼女の歴史遺産としてのフレスコ画にかける思いによって裏打ちされた、非常に丁寧な作業でもありました。膠を塗布する筆使いや裏打ちの作業にも決して手を抜くことなく、大切に扱っている様子がうかがえました。

そのような作業の中で、描画層を剥がすためにフレスコ画の表面に貼り付けていた布を剥がした時、そこに現れたフレスコ

画に私は衝撃を受けました。特に、ごく薄い顔料の層のみを剥がす方法では、完全に壁画というよりは色のみを移した平らな絵画になってしまうのではないかという私の想像をよそに、それは鮮やかな存在感を示しました。漆喰の層から剥がしたものはもちろん、顔料の層のみを剥がしたものも壁のコテ跡や継ぎ目を再現していたのです。本当にこれはもう壁から独立しているものなのか。実際に目の当たりにし、触れてみて、その保存の状態と壁画の状態の差が予想していたよりもはるかに僅かなことに驚かされました。

この実習を通して、実際に体験することの重要さを実感しました。知識を蓄えることはもちろん重要で欠かせないものですが、マリアローザさんの傍らで彼女の呼吸を感じ、その技術を自分の目で見、作業の一部に参加させてもらったことで、知識が色や温度、質感を伴っていきました。また、文献調査だけでは困難な、自分たちだけの発見や視点を得ることができ、これからの研究につながるテーマを見出していくことができました。

何かを選択する際には、他のものを切り捨てていかなければならないこともあります。私は修復士たちが苦渋の決断によって壁画を剥がしていっているように思っていました。しかし彼女の姿勢を目にしたことで、彼らは選択というよりはもっと切実で真摯な想いからこれらの方法を選んでいるように感じました。それは、何らかの原因により倒壊したり、取り壊されたりしてしまう建築物からフレスコ画を救うことを突き詰めていった結果、最終的に導き出された答えなのだと思います。

実習では細部まで非常に丁寧で私たちにも手順が理解しやすいように教えていただきましたが、フレスコ画保存のための世界トップの技術だけでなく、その精神を学んだ一週間となりました。

剥がした壁画の前で金沢大学の学生等と

２種の３Ｄレーザースキャナでデジタル記録

イタリア人建築家　カルロ・バッティーニ氏を招へい

本センターと国立フィレンツェ修復研究所との共同調査として実施している「南イタリア中世壁画群の調査プロジェクト」では、本センター独自の調査として３Ｄレーザースキャナを利用した洞窟教会の空間記録を調査項目の筆頭に挙げています。凝灰岩質の岩盤を複雑に掘り抜いた洞窟教会に描かれた壁画の記録は、まず堂内の空間そのものを三次元で記録する必要があるからです。本センターは三次元空間記録のために TOPCON GLS 1500、壁面の詳細な凹凸を三次元で記録するために KONICA MINOLTA RANGE 5 の 2 種の最先端機器を利用し、最終的にはデジタル・アーカイブとして全調査記録を一つのヴィジュアル化システム (Culturanuova 社の Modus Operandi) に反映させる計画です。

不規則かつ複雑な建築空間を３Ｄスキャニングするには、高度に専門化されたテクニックが必要で、本年９月に実施予定のフィールド調査までに、それを担当する本センター研究員が十分な経験を積んでおく必要があるため、３Ｄスキャニングの専門家で、フィレンツェ大学やジェノヴァ大学の建築学科で実践教育にあたっている建築家カルロ・バッティーニ氏を招へいして実践的ノウハウを習得することにしました。

建築家カルロ・バッティーニ氏は 2 月 19 日から 27 日まで金沢に滞在し、角間キャンパス内の複雑な構成の空間を洞窟教会に見立て、3Dスキャニングの測定方法からデータ処理に至るまで徹底的な実地指導にあたってくれ、建築調査における 3Dスキャニングの応用理論と実践を豊富な体験を通して伝授してくれました。日本の先端テクノロジーを代表する機器類とイタリアの文化財保存調査のノウハウの両輪が円滑に連動し、９月のフィールド調査を待つまでもなく、早くも順調な回転運動を始めたように思えます。日伊共同プロジェクトのコラボレーションは、カルロ・バッティーニ氏の招へいで、ますます密度の高いものとなりました。

金沢城 菱櫓の建築技法を調査するカルロ・バッティーニ氏

Special

特集 2［南イタリア中世壁画群 診断調査プロジェクト］

第 2 回予備調査：世界遺産マテーラ

フレスコ壁画研究センター長　宮下 孝晴

マテーラの パノラマ

洞窟住居の街、マテーラ

バジリカータ州マテーラ県の県庁所在地であるマテーラ市は、グラヴィーナ峡谷に沿った岩肌の斜面に建設された洞窟都市で、1993 年に世界遺産として登録されました。

その起源は旧石器時代にさかのぼるとはいえ、現在の洞窟住居群サッシ (Sassi) 地区は、8 世紀から 13 世紀にかけて、東方（シリア、パレスチナ、カッパドキア、シチリア）のイスラム勢力から逃れた修道士たちが、130 以上の洞窟住居を構えて住み着いたことから独特の都市を発展させてきたものです。ほとんどが小作農民の住居であったサッシは、南イタリアの貧困を象徴する風景として紹介されてきたため、1960 年、イタリア政府はサッシ地区の人々（15,000 人）を新街区のチヴィタ地区に強制移住させました。

1970 年代以降は建築学的な見地からの関心が高まり、景観の保存と住宅としての近代的改善が積極的にすすめられ、人々はチヴィタ地区から再びサッシ地区へ移住しつつあります。私たちは本プロジェクトの予備調査として、1 月 16 ～ 18 日にかけて、この洞窟住居の街マテーラの洞窟教会に描かれた中世壁画の現状を調査してきました。

東西キリスト教文化の出会いが育んだ独自の美術

キリスト教文化としては、東方からのギリシア正教とベネディクト修道会によるローマカトリックが混交してイタロ・ビザンティン様式の美術を展開し、洞窟教会（chiese rupestri）の建築や壁画には多くの興味深いテーマを見出すことができます。とはいえ、凝灰岩質の崖を穿って建設した洞窟教会や礼拝堂が、マテーラのサッシ地区だけでも 130 以上を数えるというのですから、洞窟文化の概観を把握するだけでも大変です。今回の予備調査は私にとって三度目のマテーラ訪問になりますが、1993 年に世界遺産として登録されて以来、計画的な調査、修復、保存作業が実施されており、かつての廃墟都市はユニークな景観を誇る博物館都市に変貌しつつあります。今回は市内にある以下の 4 つの洞窟教会と、マテーラ市郊外で近年発見された「原罪の礼拝堂」(Cripta del Peccato Originale) を訪ねました。

◇サンタ・ルチア・アッレ・マルヴェ教会 (Chiesa di Santa Lucia alle Malve)
◇サンタ・マリア・デル・イドゥリス教会 (Chiesa di Santa Maria dell' Idris)
◇サン・ジョヴァンニ・イン・モンテッローネ教会 (Chiesa di San Giovanni in Monterrone)
◇サン・ピエトロ・カヴェオーゾ教会 (Chiesa di S.Pietro Caveoso)

壁画研究の観点からはサンタ・ルチア・アッレ・マルヴェ教会が最も興味深く、岩盤を掘り抜きながらも三廊式の教会様式を実現しています。また、マテーラで最初のベネディクト修道会の尼僧院らしく、マリアの母性が強調された「授乳の聖母」や天から舞い降りてきて悪魔や外敵を蹴散らしてくれる「大天使ミカエル」などの素晴らしい壁画がよく保存されています。

サンタ・ルチア・アッレ・マルヴェ教会入口

サンタ・ルチア・アッレ・マルヴェ教会堂内

「暑い日には、羊たちと天国で昼寝」

マテーラ市から 14 キロほど南西の郊外に、近年発見され、新公開となった洞窟壁画があるとの情報を受け、私たちはさっそく現地へ。敷地を管理するワインメーカーの許可をもらい、ブドウ畑が左右に広がる小道を延々と歩いた先に、その「天国」はありました。

夏の強い日差しを避けて自分はいつも天国で羊たちと昼寝をするのだと、ある老羊飼いが話しているのを耳にした人が、そのリアルな語り口に惹かれて同行したところ、エデンの園を含む旧約聖書の物語が壁面いっぱいに描かれた洞窟壁画を発見したというのです。鮮やかな色彩とナイーブな表現で一躍脚光を浴びた洞窟は今、「原罪の礼拝堂」(Cripta del Peccato Originale) と命名されて厳重に保存管理されています。

南イタリア各地では、このようなドラマチックな洞窟壁画の発見が今も続いており、広範囲にわたる中世洞窟教会に描かれた壁画群のカタロギングと詳細な学術的記録が急務となっています。新発見は歴史的資料の追加という点では大いに歓迎されるところですが、実は大気汚染などの環境悪化が急速に進んだ現在では、発見はとりもなおさず消滅へのカウントダウンでもあるわけです。

原罪の礼拝堂壁画

「日伊文化財協力事業ワークショップ」開催

金沢大学フレスコ壁画研究センター・文化庁連携事業　　会場：国立フィレンツェ修復研究所

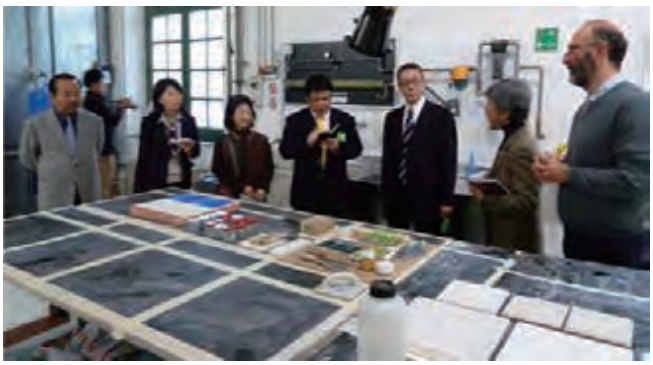
日本の古墳壁画の問題を報告する 文化庁 建石調査官

南イタリア中世壁画群診断調査プロジェクトを展開する金沢大学フレスコ壁画研究センターは、1月 19 日、20 日の２日間にわたり、文化庁と共催して「日伊文化財協力事業ワークショップ」を国立フィレンツェ修復研究所等で開催しました。この事業は、日伊の壁画の保存手法等に関する比較研究を行うことにより文化遺産の保存修復に貢献すること、また、日本の文化庁とイタリア文化財・文化活動省が文化財保護に関する政府間交流を通して、行政官及び研究者、技術者が壁画の保存修復と活用の調和に関する専門的な意見交換を行うこと等を目的として開催されました。

ワークショップには、イタリア側から国立フィレンツェ修復研究所のマルコ・チャッティ副所長、チェチリア・フロジニーニ壁画部長、専任修復士等 5 名が参加。日本側からは、文化庁文化財部伝統文化課文化財国際協力室 田中健太郎室長補佐、文化財部古墳壁画室 建石徹 古墳壁画対策調査官、奈良文化財研究所 降幡順子主任研究員及び金沢大学フレスコ壁画研究センター長 宮下孝晴教授ほか研究員２名が参加しました。

はじめに本学の宮下教授がフィレンツェのサンタ・クローチェ教会壁画修復・復元プロジェクトの現状と経過を説明。文化庁 建石調査官から「日本における壁画の保存」、降幡主任研究員から「高松塚古墳壁画の科学的調査」について発表があり、イタリア側からは「イタリアの壁画修復・保存の実情」について報告がありました。その後、種々の意見交換を行い、両国の最新の研究情報を共有しました。また、サンタ・クローチェ教会大礼拝堂の壁画修復現場、国立フィレンツェ修復研究所のラボ等の視察、ピサのカンポサント及びシノピア博物館等も訪れ、イタリアの壁画修復・保存の技術及び実情を視察しました。

文化庁側から、本ワークショップの成果として、金沢大学が日伊共同で推進する南イタリア中世壁画群診断調査プロジェクトは日本の古代壁画の保存の在り方を考える上で参考となる例であり、今後、さらに日伊の研究者の交流を深め、金沢大学フレスコ壁画研究センターとも連携して研究調査を進め、日本の壁画の保存科学の進展に寄与したいとの抱負が述べられ、大変有意義な２日間となりました。


国立フィレンツェ修復研究所ラボの視察

研究者の横顔
第２回

フレスコ画に問う、耐久性設計のヒント

金沢大学 理工研究域　教授　五十嵐　心一

◇所属：理工研究域　環境デザイン学系　◇専門分野：微視的構造、画像解析，顕微鏡観察
◇研究課題：セメント系材料の微視的構造と破壊過程 / 繊維補強セメント系複合材料の力学的性質 / 高強度コンクリートの若材齢における特性

母なる石灰から生まれた「技」の兄弟

私の専門はセメントコンクリート材料科学といわれる分野で、私自身はずっと電子顕微鏡観察を主たる研究手段として、コンクリートの物性発現をミクロの世界の特徴で説明することに腐心してきた。かなり地味な世界で、普通の人が私の撮ったコンクリートの電子顕微鏡写真を見ても、フレスコ画を鑑賞した時のように感動してくれないだろう（私自身は感動してしまうこと、ままあり）。しかし、両者は全く別物かというとそうでもなく、私が扱うセメントコンクリートとフレスコ画はルーツが同じで兄弟のような関係にあるともいえる。母なる石灰から生まれた「技」の兄弟のうち、長男は芸術技法として成長し、数百歳年の離れた弟は技術として育ったともいえなくもないのである。

コンクリートとフレスコ画の共通点

フレスコ画が数百年経た現在でも当時の鮮やかな色を保持しうるのは、中性化という作用により表面に生成されたわずか数μm程度の厚さの炭酸カルシウム層が、壁画表面の顔料を保護してきたからである。一方、コンクリートも表層にて中性化という現象を生じるが、鉄筋の腐食に関わる場合があるので一般には負のイメージでとらえられている。しかし、その一方で、コンクリートにいったん発生したひび割れが、炭酸カルシウムの析出（せきしゅつ）により閉合するという現象も古くから知られていて、これを自己治癒と称している。つまり、弟も兄と同じ遺伝子を有し、コンクリートも中性化により護られるのである。

「コンクリートから人へ」の凄まじい当て擦りともいえる逆風のなか、これからのコンクリートは環境負荷低減や持続可能性とは無関係ではいられない。これにコミットしていく一つのアプローチが、コンクリートの耐久性設計の確立であるといわれている。コンクリートが数百年にわたって機能し続けるためのヒントをフレスコ画に問うてみようと考えている。赤の他人じゃあるまいし、きっと何かを教えてくれると思う。

column

私のおすすめフレスコ壁画
第2回　私のおすすめ鑑賞法

金沢大学 人間社会研究域 学校教育学系
准教授　江藤 望

イタリアゴシック期のフレスコ壁画には絵画的な描写以外に、聖人の光輪や貴族の宝飾品などの表現に用いられた立体的な装飾技法が施されていました。これらにはかつて金属箔が貼られていましたが、今日ではその多くが剥落しています。

本学が修復に取り組んだ「聖十字架物語」も同様で、この作品ではフリーズにまでもその痕跡が認められます。金属箔が壁画全体に貼りめぐらされ、完成時には黄金の輝きで観る者を圧倒したに違いありません。

当時、壁画は蝋燭等による揺らめくやさしい光によって包まれていました。箔が貼られた立体装飾はこの環境の中でこそ、その効果を発揮し、神々しい輝きを放っていたはずです。この輝きは、依頼主の財力による豪華さではなく、画家の信仰心の高貴さから生まれたものではなかったでしょうか。

今日の明るすぎる照明下では損傷ばかりが目に入るかもしれません。時には瞼を閉じて想像力を働かせることで、かつての環境に身を置き当時の壁画の姿と人々の心に遭遇できることでしょう。

（右図）アーニョロ・ガッディ作「聖十字架物語：十字架の発見と検証」（部分）、1380 年頃、漆喰や蜜蝋による盛り上げ部分に金箔が貼られていて、当時の豪華さは現在の比ではなかった。

2010 年度下半期　トピックス＆イベント

ランチタイム・コンサート
フレスコ壁画と音楽のハーモニー

12 月 6 日、角間キャンパス内に復元されたサンタ・クローチェ教会のフレスコ壁画前で、学校教育学類音楽科の学生によるランチタイム・コンサートが開催されました。コンサートは、学生による定期演奏会の宣伝も兼ねて出演する学生たちが企画しました。

マリンバやオーボエ、トランペット等の音色やソプラノの歌声が赤レンガの吹き抜けに響き渡り、昼休みに大勢の学生や教職員が、音色にひかれて壁画前に足を運び、美しい調べに拍手をおくっていました。同壁画前の空間は、天井が高く音の響きがよい上、演奏されたクラシック曲やゴスペルの歌声に、壁画の雰囲気がマッチして荘厳な印象を与えており、演奏場所として好評でした。

キャリア教育の一環として本学を訪問した中学生に復元壁画を解説

11 月、金沢大学附属中学、金沢錦丘中学 2 年生の皆さんが、それぞれキャリア教育の一環として金沢大学を訪問しました。これは毎年この時期に行われており、地元の教育機関である大学を訪問し、研究活動を見聞することにより、将来の目標設定や高校に向けての学習意欲の向上に役立てるものです。

生徒たちの訪問コースには復元壁画見学も含まれており、センター所属の教員や研究員が、フレスコ壁画についての基本的な説明や制作の経緯について説明しました。

宮下孝晴教授
「イタリア連帯の星」勲章受章を祝う会　開催

本センター長で人間社会学域人文学類の宮下孝晴教授「イタリア連帯の星」勲章「カヴァリエーレ（騎士）章」受章を祝う会が、有志の発起人会主催で、12 月 4 日、金沢市内のホテルにて開催されました。勲章は、宮下教授の日本におけるイタリア美術史の普及・促進のための熱意あふれる活動や、本学の国際共同プロジェクトである「サンタ・クローチェ教会壁画修復プロジェクト」を統括するなどの、日本とイタリアを結ぶ数々の業績が高く評価され、イタリア大統領から贈られたものです。

祝賀会には 120 名を超える出席者が集い、本学学校教育学類の大村雅章教授が発起人代表として開会のあいさつを、続いて中村信一学長をはじめ、宮下教授と親交の厚い、各界からの出席者を代表して、北國銀行頭取の安宅建樹氏、石川県立美術館長の嶋崎 丞氏らが祝辞を述べ、元テレビ金沢会長の北 実氏が乾杯の音頭をとりました。その後、宮下教授の業績を紹介する映像が流され、教授が会長をつとめる「金沢イタリアの会」のリードでイタリア伝統のカンツォーネを出席者全員で合唱するなど、宮下教授を中心に出席者が互いの親睦を深める、和やかな会となりました。

会の終わりに、宮下教授より、今後も日伊の架け橋となるべく、現在進行している南イタリアの荒廃した壁画群を調査・診断するプロジェクトにまい進するとの決意が述べられました。

2010年度下半期　活動一覧

（11月） 金沢大学「日伊教育研究連携事業」
イタリアの壁画修復士を招へい、
学生へ講義・実習指導
（12月） 宮下センター長「イタリア連帯の星」勲章受章を祝う会
（ 1月） 本センター・文化庁連携事業
伊で日伊文化財協力事業ワークショップ開催
南伊プロジェクト現地予備調査実施（マテーラ）
（ 2月） ニューズレター創刊
３Ｄスキャンを専門とするイタリアの建築士を招へい

2010年度下半期　報道記録

○新聞報道

南伊 中世壁画群診断調査プロジェクト
2010.11.23北國　2010.12.24 毎日

国立修復研究所の壁画修復士を招へい
2010.11.23 読売、北陸中日

宮下センター長、勲章受章を祝う会開催
2010.12.5 北國

金沢大　市民・保護者らが施設見学
2010.11.08 北國

ニューズレター創刊
2011.03.10 北陸中日、北國

○ＴＶ報道

国立修復研究所の壁画修復士を招へい
2010.11.22　テレビ金沢
北陸放送
北陸朝日放送

サンタ・クローチェ教会壁画修復・復元プロジェクト
2010.10.25 テレビ金沢
2010.10.26 テレビ金沢
2011.2.7　テレビ金沢
2011.2.14　テレビ金沢
2011.3.21　テレビ金沢

Report ラヴェンナのモザイク壁画探訪

ラヴェンナのサン・ヴィターレ教会

1月22日、フィレンツェから日帰りでラヴェンナを訪ねた。ボローニャ経由でフィレンツェから片道 2 時間半の行程である。雨には降られなかったが、ついに太陽が顔をのぞかせることなく、終日曇天。それでもビザンティン美術の第一黄金時代（5−6 世紀）のモザイク壁画は長い歳月の流れを感じさせないほど、絢爛たる輝きを放っていた。文化庁とのワークショップで高松塚やキトラ古墳の壁画損傷に関する報告を聞いた直後だっただけに、同じ古墳時代の建造物やモザイク壁画がこれほどまでによく保存されていることが奇跡のように思われた。

塗りたての漆喰に彩色土器や石の小片を寄せ合わせて埋め込み、図柄や模様で壁面を装飾する技法は、遠くシュメール文化にさかのぼり、数千年の昔から人間は単なる白い漆喰壁をモザイク壁画に変貌させてきた。キリスト教美術を帝国の美術として制作し続けた東ローマ（ビザンツ）帝国は、光を反射して神聖なイメージを生み出すガラス・モザイクの技法を発展させ、教会堂内を絢爛たる異次元空間に演出した。ちなみにゴシック教会に特徴的なステンドグラスは同じ光のイメージでも、色ガラスを通しての透過光を利用している。これほどまでに光にこだわったのは、光こそが神の王国から地上に届く唯一の神聖なメッセージと信じられていたからである。ビザンティン美術のモザイク壁画では、一層輝かしい光を得るために、板ガラスの間に金箔を挟んだテッセラ（ガラス片）を開発して、画像の背景を埋めつくし、壁画空間そのものをまばゆいばかりの光で満たしたのである。

ビザンティン美術のガラス・モザイク壁画は、したがって「ガラス片で覆われた平面のモザイク画」という視覚的認識ではなく、神々しい光の中に浮かび上がったイメージとして心で見なければならない。とくに光のハーモニーはモザイク画が円蓋（ドーム）やヴォールトなどの曲面に描かれている場合、その曲面がパラボラ・アンテナのように周囲の光を集めて最高潮に達する。こうしたビザンティン美術の影響下でフレスコ壁画はモザイク壁画の代用として開発され、やがて筆で描くことによる写実的表現が抽象的表現のモザイク画とは別の絵画世界をめざし、ジョット以後の近代絵画の道が開かれていくのである。

（宮下 孝晴）

連載 フレスコ八景 第二景

いわゆる「漆喰の化学」を知り抜いた上で描くフレスコ画のルーツをどこまで遡れるだろうか。ジョットが完成したという通説に異論はないが、発明までジョット一人の手に帰すわけにはいかない。現在までの研究では、ジョット登場の少し前に、完成したフレスコ画法で描かれたピストイアの作例が知られている。ピストイアのサン・ドメニコ教会、聖堂参事会室で発見された「磔刑図」と、それを剥がした下から現れた下絵のシノピアから、私たちはこれが完全なフレスコ画法を習得した画家の手によって描かれたものだということを認めないわけにはいかない。1940 年に上塗りされた漆喰壁の下からこの絵が発見され、1968 年には私の壁画研究の師であるウーゴ・プロカッチ教授がその下からシノピアを発見した。当初、教授は制作年代を 1250 年頃としたが、私はその後の研究で 1275−80 年まで絞り込めることを証明した。作者については、チマブーエやジョットに先行する画家、おそらくはジュンタ・ピサーノの系統に属する画家であったということ以上はわからない。

いずれにしても、この「磔刑図」にはフレスコ画を定義する上で不可欠のジョルナータ区分が明瞭であり、画家は周囲三方の唐草装飾フリーズを含めて 9 日間で仕上げていることがわかる。また、下塗り漆喰（アッリッチョ）の層からは藁くず、上塗り漆喰（イントーナコ）の層からは麻くずが発見されているが、これは壁をしっかりと固着させるためばかりでなく、明らかに保水時間を長引かせて漆喰の乾燥時間を遅らせ、描写時間を稼ごうとした工夫に違いない。さらに、アッリッチョの上には乾燥後（ 仕上がり ）の絵具の色を見極めるためと思われる「試し描き」の筆跡がいくつも見られる。乾燥したアッリッチョの上に絵具を一刷毛おくと、すぐに水分を吸収して、漆喰が乾いた時の色調を見ることができるのである。

（宮下孝晴）

表紙：サンタ・ルチア・アッレ・マルヴェ教会壁画（マテーラ）撮影：宮下 孝晴

Centro Affresco

金沢大学 フレスコ壁画研究センター ニューズレター（年 2 回発行）
編集発行 金沢大学フレスコ壁画研究センター
〒920−1192 金沢市角間町 金沢大学人間社会研究域
電話 (076)264−5550/5472 E メール fresco@ed.kanazawa−u.ac.jp
http://www.adm.kanazawa-u.ac.jp/fresco/index.html
定期的にニューズレター郵送をご希望の方は、お名前ご住所と連絡可能な電話番号または e-mail アドレスを添えてご連絡ください。
本ニューズレターの内容を無断転載することを禁じます